



時代  
画

俳家奇人談

上

中村俊定文庫  
文庫 18  
778  
1



竹窓玄玄大人遺意

蓬廬青々山人著  
蕙齋紹真臨圖

書畫  
精造

江 戸 新 版

# 時代 俳家奇人談 模画

文化十三丙子秋

彫刻出来

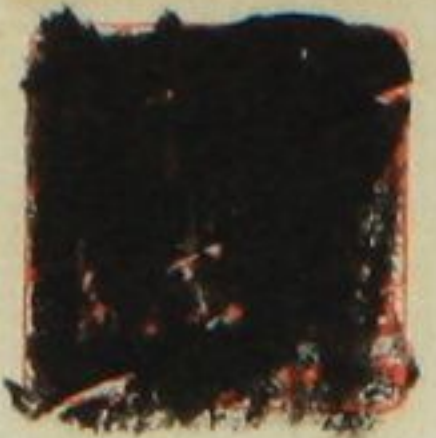
文生堂  
慶元堂  
仙鶴堂

刻俳家奇人談序

中村俊定文庫

特

曩小閑田子近世畸人哉集録一載て生出よ詳々  
方里来者何れといへども復そ其盛を継よの道  
竊乎、惟みるに永正天文の比小守武宗經此清操  
あり寔永正保名中よ貞徳季吟の卓舉あり延  
宝元録の間小宗因桃青は逸群有り且重一為茂  
貞室玄圃重粧信徳言水其南嵐雲去来文竹支考  
許六北枝燈籠来凶鬼費乙由不角原松淡淡等此一奇  
あ月く生る小雜出する所の俳家も亦その人なりと



俳家奇人談

卷之二

序

いふはるるは茲又先人玄玄一遺稿あり能奇哉好む  
 者の為小輯す依る八十有餘法持出要するや古人  
 此は所載舉てあるを知し又各句に其風韻の變  
 を識すふあり今也四里に題し之を能家奇人強と  
 けふ後來名種宗幸と權柄摸索此羅我唱ずんは僕ら  
 霍躍ゆるり是く如げふやや于肯文化丙子名威  
 初春遂屋小筆を採録

儀倅閑人書香



俳家奇人談序

倭歌者詞雅而俳句者詞俗也此之彼詩  
 與談談者俗而叶音詩者雅而有韻固其  
 自然也余謂雅俗異其詞體裁遂別文質  
 已定而意趣亦互有優劣其感鬼神動人  
 情固同之若其詠之人意有雅俗而其發  
 言不同是故倭歌與詩固雅而詠有俗者  
 俳句與談固俗而發有雅者則雅與俗不

可以詞害其意也。竹內句當玄玄一者，所謂目雖盲，不盲于心，而居常好俳句，其詠四時景象，言人事，喜戚閒適之趣，淡薄之味，往往使人有無限可感者，不為不多矣。纂而輯之，名曰詠物句選。云玄玄一嘗曰：古人之言俳句者不少，而欲尚友其人，則不可不知其意，匪事蹟也。於是乎廼撰有其美名佳句，而事之可以賞者，而遂成編。

名之曰佛家奇人談。其子再按而刺之，以繼其父之志，豈不懿哉。苟世之言俳句者，讀之辨，今古之文質，知意趣之雅俗，則有復裨益于風教，亦以為不少矣。古人有言云：誦其詩，讀其書，不知其人，而可乎？是以論其世，是尚友也。玄玄一其有感于此者，也乎？是為序。

文化乙亥秋九月既望

江都 卧舫散人撰



よるを仔細とて名をきくまはるきとて色おまへ  
 西上人のよまのこまねいひまをいひまをいひまを  
 世にあはれいひまのいひまをいひまのいひまをいひまを  
 ありあはれいひまをいひまをいひまのいひまをいひまを  
 さはるきまをいひまをいひまのいひまをいひまをいひまを  
 身は匣をかきあはれいひまのいひまをいひまをいひまを  
 けあはれいひまをいひまのいひまをいひまのいひまをいひまを  
 さいのいひまをいひまのいひまをいひまのいひまをいひまを





一日才に募て得る愛宕古画漢短尺出懐筆並び了友人  
 須美の筆を借依色亦楚北旨忘を解するの一助家  
 友一也親了人それ諸我恩一

蓬廬青青識



俳家奇人談目次

上之卷

- 一 宗祇法師
- 一 山崎宗鑑
- 一 杉田全一 附 英津女
- 一 松江重頼 附 春沈
- 一 山本西武
- 一 安原貞室 附 元次
- 一 齋友徳元
- 一 荒木田守武
- 一 松永貞徳
- 一 野々口立圃 附 警水
- 一 高瀬梅盛
- 一 鶏冠井令徳
- 一 北村季吟 附 湖春
- 一 石田未得 附 未琢



一 高鳴玄札 附 山夕

一 荒木加友

一 半井卜養 附 慶友

一 池田正式

一 芳賀一晶

一 中島貞宜 附 二葉

一 神醒忠知

一 田代捨子 附 盤桂禪師

一 池西言水

一 西山宗因

一 井原西雀

一 推中才磨 附 團水

一 田中常矩 附 常長

一 田代松意 附 正友

一 菅谷高政

一 伊波信德

一 上島鬼貫

一 園女 附 惟中

一 小西来山 附 由平

中之卷

一 松尾桃青

一 榎中其角

一 服部嵐雪 附 烈女

一 向井玄素

一 僧文草

一 森川許六

一 東華坊

一 曲翠 附 破鏡

一 惟然坊

一 勾空

一 秋之坊 附 李東

一 磨工北枝

一 僧浪化

一 僧千那

一 小川破笠

一 路通

一 梢風尼

一 智月尼 附 乙州

一 鯉屋杉風

一 野坡

一 越智越人

一 涼菴

一 曾良

一 原田守古

一 知足一家

一 生駒萬子

一 山口素堂

下之卷

一 中川乙由

一 舍羅

一 露川

一 深川湖十

一 高壁百里 附 琴風

一 紀文親子

一 秋色

一 櫻井吏登

一 水間沾德

一 菊石沾涼 附 行尚

一 大沓三千風

一 立羽不角

一 梅路

一 大言子葉

一 加茂原松

一 桑岡貞佐

一 松木淡淡

一 堀内仙雀

一 活弁舊室

一 清水超波

一 子暉巴人

一 横井也有

一 千代女

一 山口羅人

一 建初源佈

一 遊女談

通計目次八十有六談

一 玄玄居士略傳 附 今世名家費句

俳家奇人伝巻之上

竹窓玄玄一遺稿 男 蓬屋書事 冬行

宗禪法師

宗禪法師 松年名比奈里一が猪苗代二兼裁小松く連歌の  
 大己哉問き一又惜いふ家案十年開くり連奇の竹年此  
 功を積られを室妙小針里雅一と答ふ使いはく松らバ十年  
 昼夜勤ふを如何と兼裁大く一何れをく我が及ぶ西又何  
 すと感せしとりや漢北相如々は十く一て始く孝經を讀  
 唐の高適ハ六十小一と神て詩我作依はれば此變が連奇  
 達き一と亦宜ふとほや亦小修子の鬼費も是を稱し一と  
 當時雙方よりと祀せ王或耐近隣に難産阿王りる候ちその  
 屋又信ぐ一摩河般若はらみ女の奇特く宗禪一ニも海で

さんの細ごとと宗長此後一けるが官ち男ををせり又  
 時名 帝の瘡疾煙いせむつるに世史の連奇一七由全快  
 むひ一子有りを妙境入と此の奇事侍と後と少あふ  
 五此後一天淳雲か、里月の宴かあふける我歌一云とせの  
 月を曇らけ今歌うあけ句在今量法あく人の備する所  
 又連懐一七世と娘るの父小肘五の宿う素是二條院澄波の古  
 奇小侍一吟あり後二慈翁室に感懐一七世此中の父小  
 宗祇の着うあそと暮れよりあふ松風と少老海に彼法少  
 茂宗一七と一生此世を為す縁一七世傳ふ父飛二年  
 八月お湯中此客舎に寂す衆八十有二世を辞す縁の奇  
 一はうあーや鶴の林の煙も立をくぬぬる身あを眠むき

荒木田守武

荒木田守武ハ伊勢同宮の神官宗和和歌連奇哉好く一時  
 小名あ里或日連奇興乃名席又陰一少皆法辨の人くたれ  
 一由座後を又其を何れもかみあ伊宗祇傷一在く一云とわ  
 雲此娘里烏帽子着てと附ら水一殊又興阿里とど又えりる  
 嘗く童子教誡此為又一夜百首を誦す一其よとに世中  
 二字茂押は是世世中百首といふ又國人等重して伊勢編修  
 こと稱せり且能借此鼻祖宗里一名日や祚代のりも思を  
 一撰子や雙蹄君系の落一種も此調高尚人の及けり取は  
 獨吟子句をたは空巻頭一飛梅や軽く一後と祚世たる今  
 一此篇我讀し不易の什多一宜味之後末全一圍め答  
 名家を出すも此人代以く勢陽此棟梁と云ふ小字打屋一

守武靈像者墓<sub>下</sub>往時所崇<sub>ム</sub>於

度會外宮之真而其門

葉之所傳也先乾什

素出其派嘗師會

難點止附與沾測

沾測授之雪齋

後莫知其所在后乾什

索求而得之云為其古物可知也今取

以圖焉 蓬廬青書



世小「イハ」イハ成<sub>レ</sub>南<sub>レ</sub>堂<sub>レ</sub>河<sub>レ</sub>孫<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>仙<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>ゆ<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>哉<sub>レ</sub>（江戸無原を和指書成  
句等の短尺よ其指也）  
其<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>句<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>句<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>蜂<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>根<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>晋<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>臨<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>  
毎<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>文<sub>レ</sub>十<sub>レ</sub>八<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>八<sub>レ</sub>月<sub>レ</sub>卒<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>蜂<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>歌<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>越<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>来<sub>レ</sub>  
神<sub>レ</sub>海<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>峯<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>雲<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>峯<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>松<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>變<sub>レ</sub>句<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>招<sub>レ</sub>教<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>尺<sub>レ</sub>ゆ<sub>レ</sub>ん  
我<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>奈<sub>レ</sub>

山崎宗鑑

山崎宗鑑ハ近江守人本姓支那氏一々代<sub>レ</sub>足利家の  
后<sub>レ</sub>たり<sub>レ</sub>長<sub>レ</sub>享<sub>レ</sub>元<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>佐<sub>レ</sub>本<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>程<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>洛<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>招<sub>レ</sub>軍<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>尚<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>ら  
く<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>兵<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>帥<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>追<sub>レ</sub>討<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>功<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>て  
肉<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>照<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>改<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>延<sub>レ</sub>徳<sub>レ</sub>元<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>照<sub>レ</sub>松<sub>レ</sub>峯<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>す  
一<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>逆<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>支<sub>レ</sub>那<sub>レ</sub>氏<sub>レ</sub>廿<sub>レ</sub>五<sub>レ</sub>策<sub>レ</sub>主<sub>レ</sub>役<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>別<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>怒<sub>レ</sub>み<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>  
致<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>髪<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>抄<sub>レ</sub>抄<sub>レ</sub>厄<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>據<sub>レ</sub>別<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>崎<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>竹<sub>レ</sub>林<sub>レ</sub>

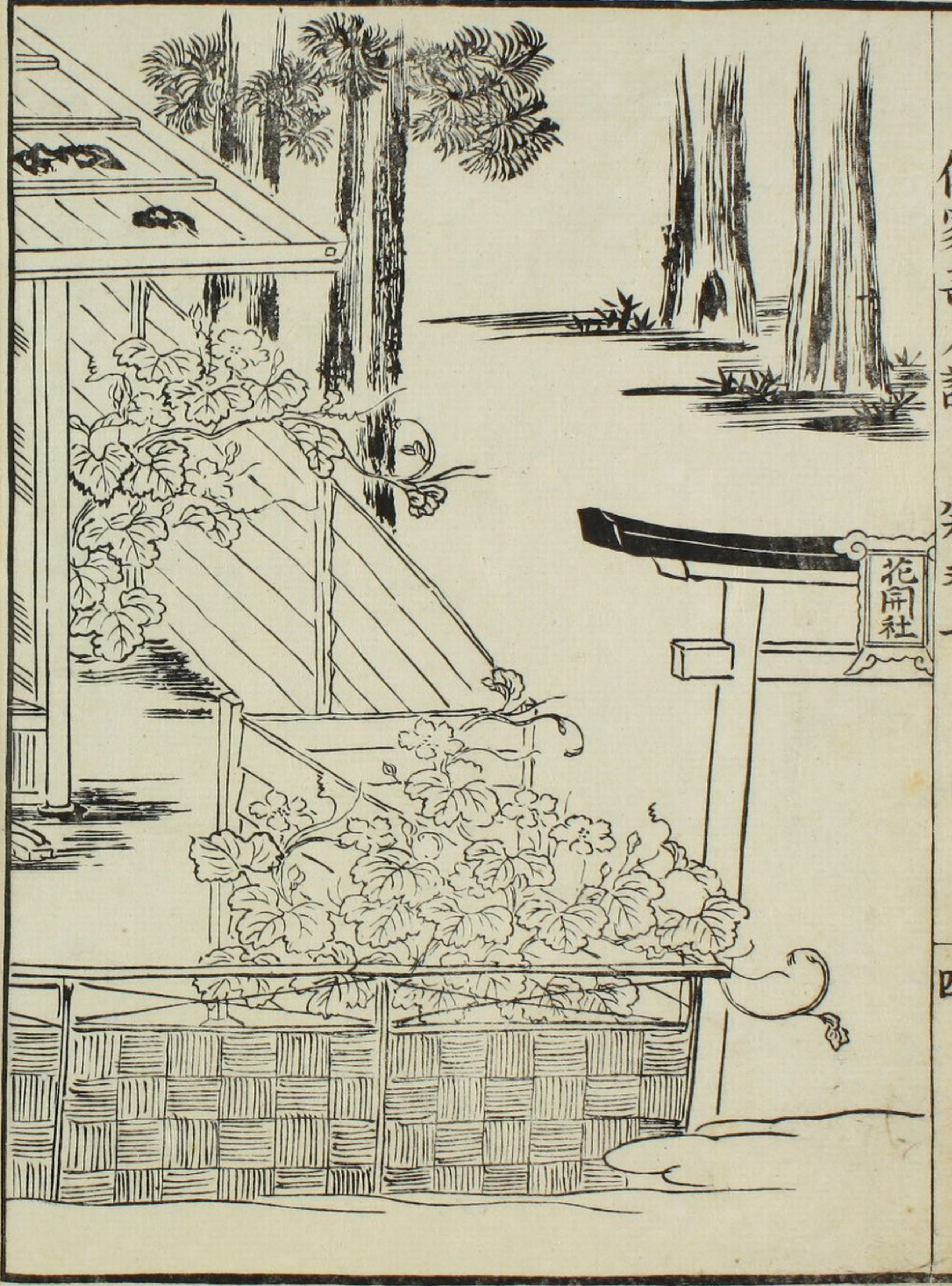
道徳素より和歌連奇不達一又徳信も長せり或時道徳院  
 駿河(宗長)諸とも糸依とて為り一巻一ける烟葉を抄  
 て鉢里りる小口は流しそ一子小持てる姿を足まは録鬼つたこ  
 と異一玉ひらる杖「おあんとすれど隻の沢水宗長」蛇一追ま  
 字何地くくするん淵が才三ふ里葉するに難後集徳信の解田耕等  
 長り根を強とち近赤城谷吾内あのはれハ清智旬在ふれを性のはら  
 る杖の字す階智を平記を準據せせうはれハ清智旬在ふれを性のはら  
 志むる変り或人「尻毛を借ふ常とくくと為て附句杖金け  
 「水鳥の尾羽れ寄けさ解く又一切くくとあり切あくもふ  
 といくるに三句所望せらわく「盗杖居へて足まは我子  
 「け屋りある月杖かくせ徳信の杖」公お記的矢れ少一長い  
 幾句はと古雅あり「手杖ついて歌あう」よる煙くか「摺小本  
 志ら依あ蘇れ花はりり「傘を足ば雨もおよ夜半思存

晩年西風く起く暁治徳河琴山北林麓了止はる仮居一て一  
 和唐といふ時ふそ又廿二年八十九歳一三癩を病ぐ死す  
 或々妻又二年の奴と辞世「宗徳」ゆえんと人の問あらばちこ  
 するとの根据あり「辞世」宗徳「ゆえんと人の問あらばちこ  
 何ぞてあのお奇くといく後蘇蘇その風流を志といを奮高徳を  
 存く「有がと記姿おがまんか記つたこ

松永貞徳

松永貞徳ハ幼名徳徳長一でも程影成米収を徳を若一旬ら  
 喉で延張丸は多長既おととい一り道徳軒と号す小和奇連  
 成好く玄旨法官を少一長嘯子成友一は一年世孫兼好が  
 徳徳村を三條の大詰又講す洛中北豪家何系ある若その言  
 小振一て今志宗徳の地を寄附に昔より社何のく何奇  
 神此あるり成志の便ち空琴書杖茲も移す空和岳人あ

小車の  
むくれ  
名  
わ  
杖まど  
我  
ゆ  
が  
欠翁  
撰御傘處



伊家可入談

花開社

四

更くはつらつ句を備す爰はめて思へらく神託に就き  
 起すべしと爰小松く小祠を繕搦して花園橋河と奉稱す  
 賀河此奇一葉代を三月の社名春社と云はれ此宮なれ云はれ此宮  
 乃そ此年の秋 吾頂より炬燵宮の本社稱を許せしれ初と云  
 嬌忠虫我あははして此年三名く 天子此年まはしてはし合ふる事ありと  
 此宮も風雨よく有第一進刻する所海物  
 夕暮の附臨 此乃不入との擧ぐく是小傍於す時了武成定より始  
 附合興河河より一宮の六年あり今まは西武よて秋重因如月結  
 道長令使執筆と七人あり 附合 爰句満と正潔あり一膝得るふ  
 いづれ始の時一餅らせく出立よと云長雨一雲月花一夜又見  
 くらきうふ一人の登此種や秋名月一冬ぶの里六樓まで穴  
 晩子失明の後赤茶二人あり 殊重満足祝意と名く年長トて  
 殊重の僧と成里満足と執筆とあり 祝意の里は末代まではと又

可算の位な里何年の年と有けんありて竟持祝意  
 大佛殿北南北才許多を湯里くみ月く果樹茂極意  
 榜をおして材と名く申小報恩義あり納るに妙經  
 千部の子孫我以す翁あり六奇仙 上宮を子達廣大少人此費  
 此或定家等の六人あり  
 像を画くあり吟詠所あり詩奇連極忠短尺を集む直  
 小芦此丸屋 兼屋を以て園に 通に方城東為武十百南北三十  
 百箇を懸する小皆竹を以ては今圖あり字を撰板を存  
 せり金権貴小幸せらるるは此翁の頑性あり承意二  
 年小致は高八十三辞世の中一昨日の形とありあり  
 今む朽くくを製極世のありいふ系貞翁はドめ方志ありて  
 能は成爰起す羅山草山の友子を以てつ人と有は且是南  
 重粒貞室為武極國々令使季吟極名末侍玄礼一宮安靜宗



時乃松隈定重等み家宗匠より嗚呼盛衰を傳ふ

松田重一 附 美津め

松田勾當重一と勢陽神跡山北林藤一居せり生性十二律の  
 調子成聴く和の善惡を片ふ形或滑りたりといふ我朝の  
 職とも稀一つ屋一懐抱又身武が極風を慕ひ道我位する  
 在にが如く老後當り一貞性の流刺まきと交り一とぞ生勾當  
 殊又笑えらるる一嘆堂の足らぬ不どの名音うか一替れとたく  
 身とが系松船「松枝ぐりく常藤や園の布思のけりき此時  
 小して是妙何らんその寛く水七年六月八十三歳一と死  
 つ人美津めと同玉山因松本老女が妻一と能清良妙子あり  
 「嗚呼小はえ菊の何れ松字「右女より志水ぬ藤代子先かを  
 つより松坂の妻めをさきり

野に立圃 附 清水

野に立圃初名初重信姓離居市を居る此常居鳥九家  
 此館より近く平生お入して賄和奇意及も多つさい水里  
 字初初重より虫法を傳へ里狩探幽あり画別成地より  
 ういひ己が長おる所欠つ言足のお子あり「八字北隣を  
 益思ぬ「水水や汗も滂も夕夜「山堰と終ふの名りや立圃  
 「屋ふけくさぞ家落林と東山世人噴草を「世の軌別と  
 らく是成稱せらるる引する附案七十一歳文九年九月あり詩  
 世「月急の三句目を今あるせうか

まき本路も水も立圃門「「立圃屋と号は「玄来る年の歩  
 みや魚千里「室暖の根候も習いと窓北梅「今日北序雲も

後川福禁う家「初づりり習依染や千量逆小沙言を継ぐ  
能信彩式を著つて享保十八年小死す

松江重程 附 去澄

松江重程俗名大文字屋治右「能名維新といふ小家小逆を信  
習にそ風格おと立團と信伴すべし」彼等とて意地を抄する  
意もぐ家「既礼の持ばうをゆく復形う家」秋やけさ一足又知依  
拭い椽「料理河里隈み冬家」松と家「此子生待後庭」て  
同つて交を絶おと教多おあり家永の流うとよ布子集を撰す  
保時立甫「管公を河世せまう此条う家といへる句戒加入せん  
戒程む程沙の句「世のまう家」は同縁なればと交がけは甫此の戒  
沙小公ふ沙も句縁より後けまうより「進られけまうも縁」  
許おせは是れ依く「沙牙此初み姑く縁より程返く此を恨ま

他日甫戒害せんといける沙海お水をもひく澄才なく甫まも勤  
嵩せり又毛吹竹我作水の時影山の正式とも矛插又れよぶ  
あま正武治又貞室亡母の退牌又「禁と益北着く此れ佛の発と  
いふ句戒不せりお小程おまを微水より不快と成まう程  
室が鼻の信を「招教と目まけ戒為てやは交を」けこのにに  
片みりる室沙をもひく「送客とは身此為の太文字との中此引る  
此句前表と成し「や此子百と家く身備りりぬ延室八年廿  
十四歳あり

書本去澄の初め重程の門「て後刻想此子と家縁成り  
程のつ徒「重常重才重好重何り是戒は重といふ長  
澄その列又入んる戒既に程ゆるはず澄お水も志ゆあり「破  
つて貞想又属まうと「奈良法沙若葉つむしや此小神「様めや

巨魁にてこれけりるまこと正徳二年に死す

言淵梅樹堂

言淵梅樹堂の京洛に居して院心子と号して「東より西にわたる」  
初目より「菊華や露も咽ふも悠たす」  
「婦人の片竹とあるを  
想う素」  
「養生書」  
「あやうけ又奇」  
「遠する此文元  
阿」  
「異」  
「年」  
「八十」  
「九」  
「歳」  
「に」  
「く」  
「死」  
「す」

山本西武

山本氏之初免系形に倣して綿を著し後に入して西武  
といふ世に於て風が新とも号して「大上戸」  
「が」  
「小」  
「在」  
「る」  
「ふ」  
「ざ」  
「う」  
「あ」  
「一」  
「回」  
「を」  
「く」  
「ら」  
「な」  
「ら」  
「ぶ」  
「や」  
「文」  
「珠」  
「ぬ」  
「け」  
「ん」  
「ぞう」  
「か」  
「ぶ」  
「く」  
「小」  
「身」  
「の」  
「威」

果て何とせむ「芋」も子成生ば三ふ此月夜く家「金」持の懐さうよ  
亥宿子く素世人登家より河家の執筆ありありあり秘法意く  
習ひ得たり河も毎歳三物を組む他小伴さげ唯我と正徳  
西武とあみま言我は人のとち辰時より河宿病床に於て  
此子小能及の武を懐る虫いはいはく

能清拙意の俊臨堂中へ別ち伴名中の拙意此次人丸家像  
一幅巻中の合名時小掛可程の送物小張巻中の巻

霜月朝白

長頭丸判

西武庵

雪の人多知申す新海切の寂戒せらるるの及の雲加小叶ひ  
るりちりり時人中合まるといふ死してより夜露籠波を編して  
初心成算知樞といふ虫を著してこの年の麻袋立つ何の年か

白

家音

子

子

子

子

子

子

存け世七十三歳一々死せり辞世「世の世々」云々

越前井令徳

越前井良徳の京師名人地隣唐と号は後又尚今天子  
以て百十三代北清律を譯して徳と改む「徳比江の波北波や松  
嶺子」稻妻のねとくげりてや夜這星「神塚」名纏り杉葉の  
音うらうら「子合羽音打拂」ふ神もた「或時伴歩」守  
武又徳く獨吟子句成るは河原と深く生を感ぜり  
延宝七年九十一北清を終る京師波集り「良祝と有  
て」歌子何ち成するう山北に良忠と河川と「冬てとい  
北三禁やふえ依今日の妻と良徳が後了」記すハ忍く  
空一つなる屋

あ系貞室 附元次

あ系貞室初名正室一囊軒と号は世更巧小僧奇を深  
且徳義又達す有る「河の歌賦他」是なり秘重室秘書  
出水を瑛むる音一旬記此又「いは」我幼あり貞室  
雖は「今」針く廿九年世及人見は「の」廿六年と  
正室正成文一河河北製句「天長」くちを不むるや秋  
北月とい「る」小「源」志まんの名名父名を振「た」五  
子右風中に在る「稍」まきの端成「る」お「て」是「ハ」名  
作の後代までと人耳成車轉る「世」又「作」小室「形」小「更」く世  
分を垣「る」の「東」東「江」一又二句成るす「い」は「世」れ「境」  
北維食小「於」香「一」経「名」月「ハ」み「や」一「種」の「雲」  
音「ハ」く「る」以「て」為「る」我「垣」より「と」有「る」一「此」三「事」成「存」して「餘」

伊家奇人談

卷文上

十



眞  




是  
 己  
 ば  
 う  
 里  
 迄  
 此  
 の  
 山

芳山題咏多々皆

不能入

此妙境

業を焼と嘆息する小堪あり「うさふさ今の雨は枯木  
 「涼」はの堅まりたれや夜半に又霏すべし高山粟葉  
 取指掛掛小「借銭の淵の埋まぬおろふ家内室少年ふり  
 ぼく死するなり何ある杉葉ふり有けんいこ興何里と其角の  
 祀又載りり寛文十一年二月六十日祭り「そ死せり  
 て「松蔭や月ハ三五夜中納言と生程ハ「はぶさむり  
 鹿嶋山の月八んと思ひ立「るる蕨の祀新よ出たり  
 室子あま元次とのふ知り「そ英邁才何り「七夕や後王  
 多ほく「玉北橋と此句十三葉の附書作ち全と玉海集  
 万えたり

北村季吟 附 遊表

北村季吟の江州北村の人はトめ医を以て業とて産席とい

里後「平安玉津亭の麻祝とを依依借を学ぶの神め  
 成少「一「中平あり貞存忠義を交く拾穂郎と号せり  
 離るる時の名方をといふ素情時強記「そ「國学は長き  
 進その及我まとする若大平此叟を別と源氏とのりり  
 「一「遊月抄を著し「松林「る「る「る「る「る「る「る  
 大和物か「里徒然を依寄小「る「る「る「る「る「る「る  
 餘種よれよ「里と方んはれバ「学徳は「「「「「「「「「  
 家の「強よ連「して「華東人「召れ奇学所は補せり  
 万我揚つる「謙「る「名譽此事ありはや能風い  
 徳を「に「とい「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「  
 是「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「  
 肉信哉「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「

采色さいしきの系宗けいそうの作さくを續ついでで増山ぞうざん此井このい撰せんに雅客みやくのみ系けいを  
 依よる宝永ほうえい二年にんねん八十八はちじゅうはち年ねん壽じゆうを終おそふ  
 息淵そくえん表ひょうとて小奇せうき學がく取とる古ふる條じょう花はな果くだ院いんと号ごうに後ご生せい畏おそる  
 此この子この風ふう格かく極ごく乃すなは解かい小せう海かい片ぺん條じょう蝶てつ輕けい一いつ以もつ之これ為ためとす  
 名なの附つぬ和わ初はつちゆゆ山さん樞しゆ目め比ひ氣き北きた附つぬ松しょう河が里り揚やう燈とう籠ろう天地てんち  
 此この時ときとてゆゆる時とき多たく系けい元げん録ろく十じゅう年ねん又または五ごづつて死しに五ご十じゅう有あ  
 餘よ業げふをまむむ

秋後徳元

秋あき後ご氏しハ渡わた河が波なみ集あつめ人ひとのこ徳とく回かい依い秀しゆう小せう依い秀しゆう石いし田でん了りょう  
 意い一いつ被ひするに及およぶ已おひも亦また長なが良らう河がを渡わたる適たふ取と利り數すう一いつて  
 徳とく元げんと改かへ名な一いつ帆ふん字じ已おひ号ごうに初はつ免めん和わ奇き我が指さし南なん一いつて江え戸こ恒こ樂らく  
 御ご小せう恒こせり一いつ年ねん上じやう京けい一いつと刻こくつ又また入いる即すなはち百ひゃく款くわん與より何なにり「京

田舎いんがおこばの墨すみ名な我がめぐり免めん條じょう音おんぐら去さる能よれううひす徳とく元げん  
 蝶てつの舞まひ淫いん我が沙さ函わん又また留りゆう吟ぎん千せん句くを拵おこる名な  
 人ひとの知ちら依い我が永えい中ちゆう室しつ粒りゅう子こ集あつを撰せんするの時とき香かう遠えんちり  
 卷まき防ぼう小せう一いつ句く「妻つま月つきや小せう月つき人ひと目め出でる松しょう邊へん一いつ世せいの作さく  
 若わと稱せうさる條じょう「大だい和わとも屋やとていそ「弱じやく者しや北きた里り」何なにと尺しゃくと  
 寄よりかど去さる拵おこる者もの一いつ若わす初はつ心しん抄せう何なにり江えに於おて能よ出でる棒ぼう  
 するは是こゝ我が始はじめと若わ別べつ小せう於おに妙めうす時とき也なり今いま取とり生せい多た入いる  
 月つき夜よりか是こゝ大だい空くう浮うの文ぶん小せう標ひょう水すいり回わく幻げん化か如に夢ゆめ如に影かげ如に氷こおり月つきと妙めう  
 系けい係けいりか

石田未倚

附未倚

石田いしだ又またたう江え戸こ妙めう人ひと友とも智ち阿あ小せう佳けきり何なになる有あるや去さる  
 妙めう又また係けい係けいもたう再また江え戸こ一いつ系けい里り妙めうを中ちゆう一いつ名なを未み倚い



と改め徳元玄れと変り上系して重程を徳と稱み逆又刻の  
 小の乾榮と号に「葉子やりの香をむるちこの表」記一並  
 て藤らまぬ伽又すみ空りか尚時句作の伴に玄れの上より云  
 掛けト書ハ口松子小りし里立南と此附を習う一此人をあの  
 字を名成くくハ我松お又居海と額向ハ區區ちれども空清  
 替ハ皆缺ととち一寛又九年七月八十一有餘りして死に  
 男未孫父の業を継ぐ良儀と号に「河言此時海の字や居形  
 和流と狂奇まも能くくハ人まうまうとらふ天和二年三月  
 此世我玄流

高鳴玄れ 附 凶文

言鳴玄れと張河山田の産和奇我物丹意きんよ學び能潜をバ  
 名存小傳りる其長北末年江戸へ来り醫術を習う一を傍ら

能潜をおしゆ生性もと抑制して世す小疎一初又紀紀  
 友とち流云一て考業より能潜此りと勝里方と申一  
 けること四十二の表よえる「守り equal 今年ハ居く一十二  
 神或人探函が友士を給此契我乞るに「名をえ一や此  
 ぶらう友士を寄う一又一「嘆息のり何とめで友物と流  
 「番の何らガ身臭か」ん當此登時小尚く云掛の妙手と名  
 立一と巨を流うか一年瘡を病らるに自ら瘡ずれども  
 功我奏せに救目引込居あま一「君は好る居たれハ長日  
 を消す依るにとを獨吟此百韻志りる小を絶句「卯の意  
 落るハ風のたこ里うか「いざ悪境よせん松字と此附句新稿  
 一や成りりり望禮ハいつ一う流小けり或と記連申る歌  
 一書持束里點せんり我形む子速更一て巻に廿日ハ里

又同書載き一已れ名ぬのり何ましくいおご寄り  
 怪筆一が維持形一や又又及えに面倒あがら今て受  
 多くこのいいらくもあく再が点一て何そくぬ登日達中  
 打揃ひあ巻を拵糸一扱はドめ此巻本箱又ほぎれ  
 所形引合き一取後の巻この點多く善何り何まの才  
 加添一やと旨ふれ横手扱拵目く上達する扱  
 我も終此百ふすく及後巻我用いらまよ作者ぐく随分  
 出情あれ已答くはと治と即智あり  
 門人山夕江戸又後一々業我を以延室より享保此間  
 代一て強らり「意い」一延強綱目上種山いあつはや誰目  
 くりあく雲ふのる初代山夕「業む」や省世登此屋衣二代山夕  
 「人もいざ詔書ついく堀の梅三代山夕」

池田正式

池田正式と和別形山の屋敷士より能落の欠風一て既泳種  
 情あま世又及えらる句一揚と影ぞよ及此衣ぐく身身軽  
 勤ゆえんはうせふ花をたふるあははと痛恨一て「そは  
 居く及ぬや芽蹄のたふ姑先と遠一右古の及又遠一便  
 及又てはあまと暇く候らる直ふ若形よゆ記随言に及回  
 してまぶら此枝を折置取宅一と右古人持け奉る大又悦  
 及いて一その歌我下ける「何」一極あり種百ちりく家居一  
 間づた及ぬこはる屋一この機一風流の舞里あははや或  
 重形毛吹草我撰す此人名「屋列」を妻のは「め此試筆ふ  
 い」るを巻路よおす人一と物一たま一も何一う愛公一  
 浪卷の妻とといつる若の句又智らり式古水を懐里書室と

いぬ虫哉若くして空作の何屋まり哉毎ドローの狂僧人ばて方  
 了怒り直小果一柿を附たり或是又醫者狂が心をちぐけぬ  
 強く居みりる時人その柔弱なるを識者者多り里一申ぬと  
 主持てる身此猿里小為ける哉稀者多き味も有しこと又狂者  
 を去れぬる匂りの奇合部百首有り作名して平野實村布衣  
 因送二人とせ至今に於て海行する狂者者海邊古の狂名と云  
 皆まやや搦と為あゝんこ東嶺子に記せり

荒木加友

荒木審房醫術を以て江戸友智町にす久至一年上原に  
 欠つゝのり能名哉加友といふ寛文中此人有り生句お母く  
 尺は今人けり一砂りするり上代下えいさう山の意不々あそ此  
 年壽を志らぬ同時歩歩又同名の能名高きまはる

市井ト養 附 養交

江戸外料  
小外料  
のむと  
るふれ

市井ト養子々寛文の頃若は西沙に法眼又昇をせり  
 和宗小通一狂舟を能は初め官簿を編りて鉄泡沙の地面  
 探録當時ト養の本屋こころと思ひしゆみち哉えりり外科あ  
 るべし又能借をまねんで尺符又候あぶ一改革の法養交あ録の  
 天下りふ「表」の己官やゆみげれりりくら

芽賀一晶

芽賀一晶の系沙此人はトめ能借を伝徳又候まび後又之極  
 此つ下小属す「初日」小光里うと居く鏡山「短衣」小あ又替ふ  
 母の登収りふ「耳」ゆく身よまをたゆ記時取りふ「松原」飛

市井ト養

しるし

しるし

しるし



しるし



しるし

しるし

勝ちいぢし一寄若翁晚年乞種り嵐山の官戎傳りりく江  
戸へ来里冥靈堂と号す宝永四年四月二十有餘歳以  
して死せり

申時貞宣 附二禁

申時貞宣の蝶々子と号し又总持新和禁新とも稱せり初め  
季吟小波ふんで後より貞翁に倚る菊治申江戸浪浪橋あま  
住ざり「目比本や秋津すごちのこ里比年一際重足稱つる  
包むや雪の及或時吟使名伴へ「きけ復比季吟は縁より  
蝶の顔こて福里り白小「アるも涼和庭子の松と吟使名服  
せり斗り「子も何事  
享保の比本は菊板と蝶々子とてお方の字子二  
鳥者有り廻り此人を慕ひ「ちるこ「  
禁あゝ燃燭を好む一年元月「死ぬとけ生る苦あり子くの  
はる上の又文字兼且るを重ぐとき字を偏を形句申り「云

風さるい手柄ありと云はば長き一たる

神璽忠知

神璽忠知を江戸の人俗稱長三郎承應の江井坂妻法が能備  
城法宗ぶ一元月や何又諭ん移りて一何んつゝぬ小古手の藝  
う宗又「西宮や屋うぬ昔の言は枝まの秀保より白炭忠知  
嘆息せりは其角が難陀集といはく公家と云えし忠知が  
月や何んいながら身の軽法沙と禱せし後切り何し浮世  
とい云ふるうら哀ありと

西山宗因

西山次弟忠一も素肥後別加友家宗臣たり家傳小江如天海の初  
蓮奇を昌孫よ海宗んで宗温守武の風流成まゝふ天性奇才  
何んく厚く進むり宗小越より実永中主家性智者なり何

まゝく玉を去り竊り能道ふん我よせし風流感破して一流に  
始祖と宗家難勢して宗因と改宗一祖の如野は函摺一秘で  
難波の天満より居居せし梅存と稱せり無代忘吾と号し居  
を向榮といふ此翁重粒と交り流知るる鬼妻が筆記又具より  
小梅翁重粒を沙と名といえり能ちり集するに宗家長孫とふ快の後里村ありて  
蓮奇を海宗の梅存つを同して修くお舎し世來すといえり何やまら集り  
こころえり鬼妻は同留重粒を延寧の比江戸にて松念が紫能勝法林  
抄して此の如きい証と名を延寧の比江戸にて松念が紫能勝法林  
我唱初りもお折後世奥の下向何んを遠く江戸十百韻を興り  
して乃我弘む生巻取小梅翁「けまの室小儀林北本何り梅の在  
時一奥別岩本の棟主風虎露法北二公妙つ又入玉ひて上子の受  
あま一ぬきの流法はすく弘すを一こくや或日市村竹く産芝  
居尺物に仍るをまらるる蕉翁居合ら初て此翁は對面せり  
何しもつ人何某が向案は「子とばはるる竹く延こうてよ此又

# 方園相撲大

何ぞかくかきけりい外とのの  
 せりての切なめ恒根卯花  
 風より子若麦一程を裁着子  
 雲よりもてい廻又乃状  
 取出火打付竹筆此月  
 鏡すそけつらり雲の秋  
 少とそり経てもある飛屋  
 遠海を歩新て方ちのち  
 歌奈河岐さー廻向此鐘

泥柱のちんさく風よまひく  
 同柱をいさあそん毎花松  
 うん候儀して理教は弘  
 後世彩ひ粧もかく法あるふれ  
 大河よりい船海よ 石橋  
 礼敷や柵 西来せさかろ  
 無火焼てあ風呂乃桶  
 着札を以十八ヶ所打さう  
 深陰乃園入鏡持の款也  
 此時此夜をそこのまうの

さうなる小後へさ浦城り橋  
 祭礼を役も多う乃友書  
 若草のそりあそび舞  
 うつり書れらう二双袖風  
 たらせりいそむやそい記  
 相殿此堂定勝と宿のそそ  
 功りそりい志つと唯れ  
 花乃境耳はあつてそそ  
 風の口はれ書りけり  
 先イ口ハ布目れ後よ

さとら眼より南村とこ  
 深よりい下九さうらう  
 膿血のらうい海けり候  
 小次原恨らうを海へ  
 世々銀筋乃るもか  
 相をよあらうむれをらりて  
 本戸より聲ある  
 伴軍云十九  
 長六  
 梅

時をかくきそり外きの  
大車の声とわらう  
 せりそり切多垣根印花  
 風ふり子若葉一程を我若よ  
そとまきまき  
 雲もあむじての廻又乃状  
 夜出火打付竹筆花月  
信重今い  
 結すそけつるり雪の秋  
まわ  
 如こもり行てるあ再々  
 遠海を共秋そき方ちの  
おまわ  
 歌き川波きし廻向は  
 きうなるはてま捕かり橋

うん埃埃一して種  
 ば世に難しかく社ある  
 大河千の船海よ石橋  
 礼敷や柵 又木せまから  
 舞火焼てあ風呂乃捕  
 君れを口十八不打  
 孫治乃國入結打公  
 海賊た交を去河津  
 さとら眼千内ねと  
 孫より下九多うるさ  
衆のわらう

糸礼を後を交つて乃交  
 是のそりそり  
 かつの若れら千二奴袖  
細の西教  
 ねろせ乃そりそり  
おん  
 村ぬれを定那き  
 物りり  
春の  
 花り  
 泥のちろそり  
 月桂をい  
の

膿血の  
 小次原  
 世多  
 付  
 土町  
 土町

字我並りぬ梅舟小窓ひらるにおややくと冠すべしと教  
 けり後一蕉舟此多きを才子と申て生家才我稱嘆  
 一あり元一一代此名句といふに「吾家や世多分あたる  
 所許も此世古今も素一と伴せり又「秋表のほ葉は古  
 き云う系一此世中や蝶くと後進形も何れ「後好ちやい  
 此舟里紙帳「有燈の津を渡る松鶴此句をとり「俾然備と  
 異辨有り余拙する小史記忠強了「滑稽の能借の如しと  
 云ふくろの戯云我いふて人を怪む世世此ん又加ちふ意  
 ちり是古此翁若能揚おたつる此場小暇里とほはれは  
 古今小能借の上よりこのふき難波の宗因と伴賀此能書家  
 らでハちりと云借ふ天和二年武松の宿舎又及す仍年七  
 十有八

井原西窟

井原西窟の梅舟のつりりて大坂後林島一人あり一日  
 吉此社臨小於て獨吟二葉三千句を吟く空より二葉葉又  
 二葉葉とも稱せり海松齋軒と号は「我意のあ月海もは  
 ぞ初度「平抄や手あく生るる意は海「長持よ表くくれ  
 ゆく衣ぐく「鯛の意も尺奴里と何至今日此月「大崎日定を  
 記世の定う系此人ありと必学我似く鳴る生文素人名あ  
 かよあるこち世著す而小夜嵐一代男等此系紙後世り  
 仍りる近代戯作者の逸事海進書つたつ此門より月るこ  
 いひ傳ふえ録中不然は又十餘葉

推本才磨 附巻本

推本才磨ハ少女流達妙人喬徳翁と稱すは「ドめ西武がつ



行々く別武といへし西産が弟子なり。時ハ西丸の西磨  
 こそ梅舟の妻を更てゆり才磨と改より「思ひおく梅舟つ  
 うー杞柳の家」梅が香又文ゆく笛や曹子「おあまはは  
 て空王一巻考ふ家」冬本立いり冬一や山の唯住居いづれ名  
 年ふり有けん江戸へ東王「身北隠家又山を買よりといへる  
 附句一た里附の能宗活海をそりみ此我難ぢりこ更て思へ  
 活海此及名大家強るに買内此あるの知はるハ江戸名能強  
 忍るゝにぬらばとそ年の考り又「夏士を我買くゝ夏より  
 こー北磨活海修くはそ「鬼や南の年を月うーや夏の夏士  
 とーて空過我改とをとうやいこ種強といふ屋ー後在里  
 阪りえ文中八十二歳一て死せり  
 北條園水と才磨がつ子一と名眼兵士と号に生涯清くま

宗んぐ既籍の標を守極「びとくと山系名ある種厚「活  
 幸も編笠ぬがぬ桑山子ふ「八羽や町小形燈のそりつ  
 宝永八年又死に辞世「たがろく引屋く種月清一

田中常矩 附 長

田中常矩ハ系部名人其妹と号に本行桐原源のつちり「既  
 季の性年愛風一て一隊を立川時又そ地に控く後林をこ  
 ちふる者ハ大抵此人の流一いづるとのふ一年五百額巻頭よ  
 「蛇々女が恨の障やそ此考と録トて地々女は能と称せふ  
 又「娘元小三千の林橋顔色考一  
 父常長あり風波河り立南門一て松風影と号に「初め杖よ  
 ハ里一果や榎麻本感とつふは能と此人の甥ありそ考ある  
 我憐みまはく子とせりこ

田代松言 附 函友

田代松言の江戸松人延室中瀬浪御又位して友人函友と名を合  
 世後林形三号一室調日く小変化一一字の働一句此録懐了  
 宛人を勤後一む是後名く信林飛神と名く「辨くや香手の  
 若者松修以一方折や昔より人信堂此骨の江の生風又阿ら  
 づれに皆人信借この云ぎ室一是夫の子と函友が功あり折後  
 梅翁の東折する小遇く言小後く十百款答を梓形一後け  
 江戸後林はうんあま一と京堂

函友も伴歩妙人松田室つが牙ちる延室は江戸一末里松言  
 己力成合せくも折及成廣む一入折の隆受つけぬ是もく家

菅谷言政

菅谷言政も京洛松人何水のつ又遊ぶるをまきく江同時江戸

小て盛ん又後林形はるくこはお仕水もそふ對して「末末  
 れす武流の熱本古と幾句して句ら熱本古す道社言政  
 と名折るあり古風者松士と年彌まもく「松家」子代の松  
 加はせり聲の神くぐら「松人」小桶又泥鰌さぐりみ又一風  
 家と稱一つ屋し

池西言水

池西言水の京松の聲も松能風去れより出川流傳了年程  
 着折まこ風下雲と号は元深折有名田才お震くはを元はえ  
 とは「本折の果々何里りり海者者語盡而意不盡可謂至妙  
 是よりして本折の云水と叫水も互ちるるふ「松」りり目枝ハを  
 江の山ちるは「尼寺」唯業此花の愛る種「子松」は名良の樹  
 代水より「文持」香附けり茶茶松「有味」あまふ人ふ「香

此禁「火比彩や人よて津和理代も変態不（チカヒイケシヌのチ）大手可知後江戸人  
 来く江戸無茶を著し（カハラ）「福ちく清く海く狂曲集代撰ぶ享  
 保七年九月七十有二三」〜終るつらん會後一木枯の句成  
 所く墓碑ふ沈すといふ

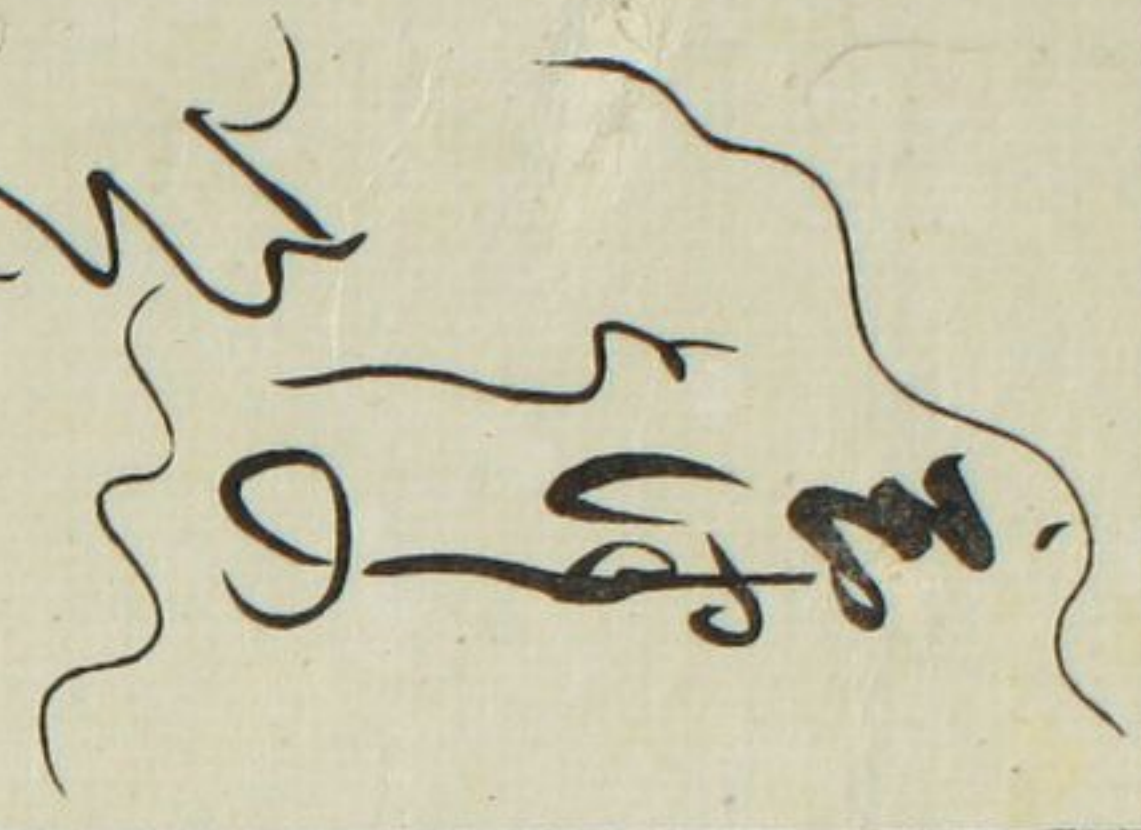

伊家依徳

伊家依徳神名宗肖樹材園と号に系流し居て和及我  
 思等と日夜お會し〜懺る我修するあり化りや〜といふ  
 或日東武管意庵あり文虫を繕く上狂の風作いっんと學ぶ  
 杉並友人教習と銘で酒較斗（オホ）興ふ家一（トナリ）句を作て  
 詠く答ふ一雨此月やつけけ〜けりけつば〜とて即妙知ぬ也  
 「富士に流るる三月七日八日ふ古今題芙蓉作無出此篇右者可  
 稱逸海一名月中今歌うはるる子も何らん晋子いはくいばよひの

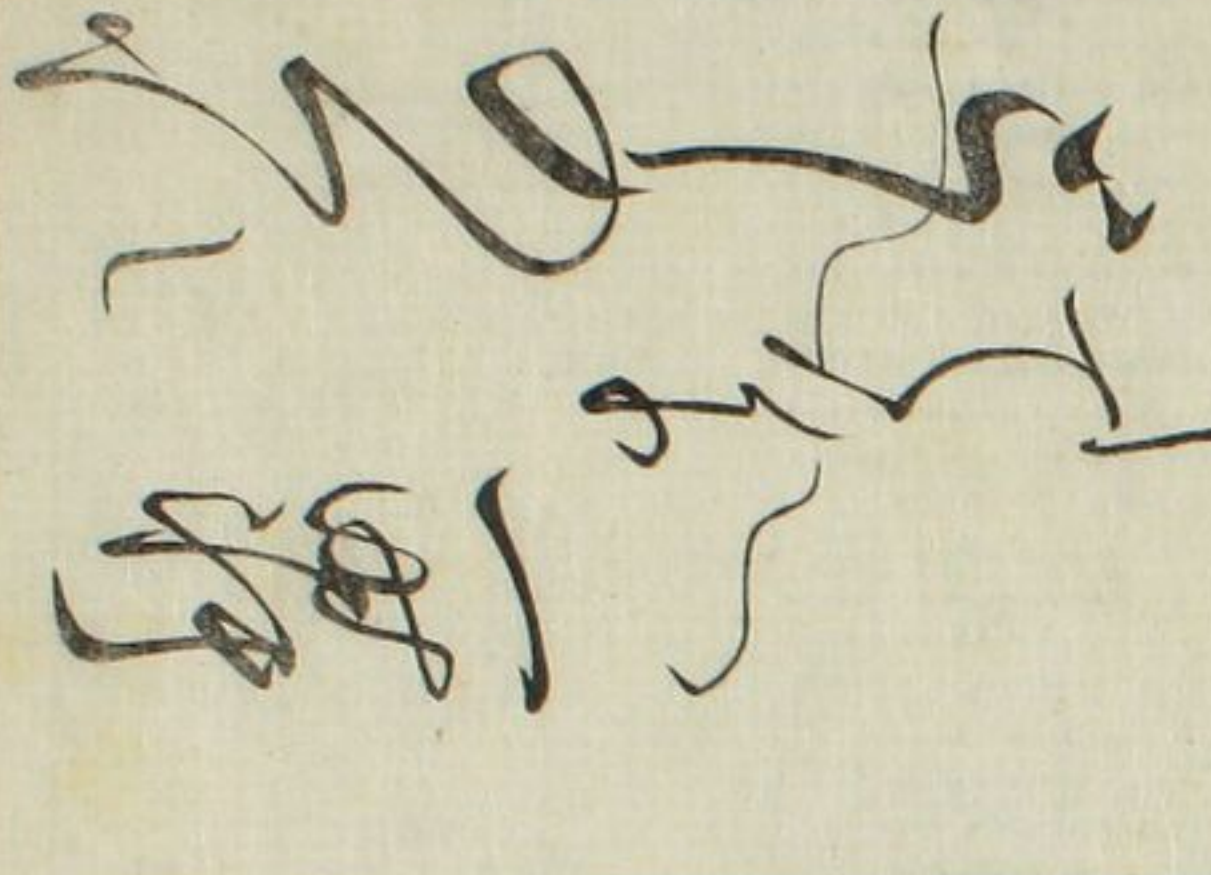
伊や人此世の中といへる（コト）知急り是（コト）今年就中揚先歌と  
 白氏の年を然りるんも（コト）叶いて老の味を存し〜と云ふと  
 り至氣さきさきの林う赤一照當て大拙うは〜「神皇正統」忍  
 や女若眼鏡〜此當みふは〜備す〜一或虫ふいひふの子  
 幼ふる附貞翁（オホ）身や翁（オホ）その方を巻〜一洋すめ徳此一字を  
 以ては翁双〜て後、西武梅園（オホ）後〜學ぶ則所〜一（オホ）向  
 盛成沙（オホ）にせり〜と申年志づく、後林の位は樂〜て沙父若  
 伴を變（オホ）は晩年眼を異いて正風は帰するところん享保七年  
 十一月六十有餘〜て歿す

伊家 附 隆中

是れめと歩抄松坂の人生管和奇を好て風流何り能得すと  
 美津め成沙〜く〜を佳境〜」入る「和何〜」や左衛門極の


 伊家  

 奇人談

伊家奇人談  
 卷之十一  
 十五


 伊家  

 奇人談

伊家奇人談  
 卷之十一  
 十五

伊家奇人談

卷之十一

十五

横狩回阿晋子か山茶の亭と異曲同工不知何先一季を於ん  
 折ゆく妻の季本うあ「夏」とふ小髪をぶらする「暑くあ「有種  
 此伴達を登りて紙子うあ是皆女流の興象はと稱すべし  
 怪中あは成おく流急は移る此はともには移て生妻とある  
 或時意符は移して来るに咬すふら出 徳振く 容意す解  
 季めく 敬恭うく 礼阿はを感して「必茶や目小まうくア  
 塵もちうー 季め振うー 三「五禁小あ我ははは移身 又死て  
 あり東武人下里病う 随後す解双して後の又晋子又依く  
 函あふ一季振立く 系流を道遠く 渡江戸へ 運里流川は在  
 恒して眼科を以く 爲の産と及友人琴風が記といはく 此女む  
 うーあり 世事に 踏く 神下 宮五弦 切く 下弦の 意緒を 聞く  
 張文彦は 蓋成るを 水奈うー 小用る こんど 持て 虫 経く こと

友起りも風雅のうん此興を重なりしを記は佛道よの  
 天窓お冬と水と高申を十筋ばかり残さ極も可弁一  
 ハ唯一思むく一我忍る成屋一 彩の如き若ゆ人 禪理も悟及  
 せーりや旬ら雲虎和尚又答ふ出るも  
 束虫の類指尺中の不束去不束忘の大方 雲根 深遠も ねず  
 海和将ふ多 珠く 珠い一心 深遠よ 上々の 不根 柳を 纏り 在り  
 我の唯その 修うて 若ふ 句をいひ 奇我 纏く 遊や ゆるり みる  
 昔益北に 業ちうば 一切 種も 業益の 口業 又て 法身 在り  
 嬌はく 我 平由 若 仍い 念 仏と 句 已 奇と ちう 極 妙人 妙を  
 あり 地獄く 海るの 同 出くー 和 玉 款 自己 念 具 不 覓 心 清  
 燈 已 燈 一 燈 心 市 中 黙く 有 明 鏡 全 識 人 間 清 淨 心 燈 け 人 燈  
 う 知 屋 紀 有 了 何 ぶ 記 業 亦 色 あり 奴 法 此 事 の 一 也

空才氣すづく此の如くと享保八年六十歳して名残初読  
 と改め冠里公女母君人仕人同く十一年四月六十有三月  
 死に辞世「秋は母君の隠居し一宮の愛り歎く南無阿彌陀佛  
 圖西氏の家の依り人はドめ金つゝ学づく一有とのひ後梅君  
 小後てより佳中と改む一時軒と号す「王名や松よはド免  
 妻は月」よく愛くする人取せ山梅をそくせ旅の妻了「遠く  
 常古いいとく旅ふる衣づく壯業より醫を業とて難波又  
 遊たり又虫成能して生名懸るはゆえ保五年又致に

上清鬼妻

上清鬼妻の抄御伴舟の人針料を所く浪屋又遊ぶ家多し  
 費用少く一人その一女成権貴れ妻又愛んる成すむむ  
 多く此を因縁す生性の厳正なる古平初のおし旅る成或は

意の海邊と悪事をけりや死又生小止山若法會を妨ぐ意に  
 いづのたいな依安強あり考後百徳書を重程よはふんで  
 鬼妻といふ元孫京保此百東山と唐形して名四才又咬ゆ  
 或何得言成一回せりねく「屋あふふく喰くる山業ふ是端  
 的機障何減栢樹子く旅名のふき」油片し油片しつゝ寐ぬ依  
 然情歎面「復のあこをぐはちやと云れり」ふよつ厚里と秋の  
 空方よ依りあま此山此句雄澤得妻青蓮風骨「夕立の又や何妻  
 下結はくや」砂水の捨取ちり出たる声「妻の所や妹が湯を  
 頼りふ里」扱すとや何ふ面白は返る天性親屬して誰強  
 隔らば人言又詭秘する子知ぬは「妻はドめ司犯していそ  
 已二十小満づるは先沙松江の岸と梅得列屋の令よおるる  
 「ちよとんふ八道起も妻一若野山といふあふよ」穠に雛を下て

娘らくとに附く有り執筆より吉野山と執筆のありやと知られ  
 尚或やして吉野山迄の盛衰は秘といく執筆はけりたたり  
 けりといふ古奇有り云是いつは里と云ふ名をいへばむ  
 くハ彼玄旨法中より劣らぬ才力感ずるに録有り扱ふそ此子  
 業成るる業此下その御書を継とる方一宜あるる業伴子  
 此元祖と伝る成一年歳の教習て蕉翁の形扱するに違て  
 「何るく扱と知れはる」一祚おく里晩年囉々聖居士即  
 稱きり元文三年小治政

小西東山 附里平

小西東山ありと法尋といふ素是抄壞の聲少小より父母狂ひ  
 秘伝此為又書育せりは為又化る我勤めず只此後法よを  
 好む時了里平法く以て牙子と名けり其書秘教あるべきを

十代傳法齡いすご二十ありは素をまきく河家と名る十葉  
 嘗と号す中禁澄林の翹楚して古今又名茂垣一達人あり  
 「元月やけれは野川此水の音興象幽美」三味線と小奇も此  
 らは梅若急精確「む」つていむ「つて」捨はる此事困めう素  
 此竹あけり及むは「急」く死ともなひが痛うみ流るる流るる  
 川や竹で足ふく時あり「涼」はふ田橋を田川後里より二乃自  
 可稱合作「子嵩ぬれ」怪子ひる川あり嘯山はく林園一  
 徹兩時集此時是景可想「兩戸あり松の姿や灯念狂ひ金氣  
 錚」松此と校「拂」ころはつ「たり」乘興自在「初春と田川  
 何」そふ秋と候あり嘯山いそく以温雅く調寓悲憤く思泉  
 為「傑作」我ぬと成る何げく入る室はくあり天清法師と  
 女人形の記すくふ形も此句有り深田子の記はる此隆坊ハ長

尺ばくり登りて松尾ふかき味今亦於十葉嘗り秘す所  
 とつ蓋し西宿舊値多岐多支奇里といふも此奥が奇正  
 して古今我踪踏す所が如おぬ及たす要するに西山の一流  
 此人出てより後世了大威きりるるぶ屋  
 前川由平と梅翁のつ子して東山が海あり伊年親よひて  
 自入と改むを作多く尺に「珍や三々此月はく今日の海山姥  
 が至らぬ山や雲が家室永伸津の玉水増え及に

伊東奇人談巻上終

文化十三年新鐫

先哲叢談 念齋原先生著

全八卷

此書ハ文祿慶長ノ際ヨリ享保元文ノ頃ニ至ル迄名聲籍甚ノ碩儒聞  
 人ノ列傳ニシテ其姓名字號俗稱生誕没故ノ年月日ニテ洩サスルシ  
 裨史劄記及ビ口碑ニ存スル言行ノ奇談ヲ悉ク採撫ノ古人ニ面接シ  
 テ往事ヲ見ルカ如クナラシム其言行萬實アリ博覽アリ抗辯アリ嬌  
 俊アリ執拗アリ介僻アリ可貴可感可喜可驚可哀可笑ノ佳話甚多シ  
 故ニ看官大ニトル時ハ脩身齊家ノ模範トナスヘク小クトル時ハ温故  
 知新ノ談柄トナシテ固陋寡聞ノ謗ヲ免ルノ術此書ニヨラスシテ又  
 何カアラム研尋ノ君子一度巻ヲ開カハ終日手ヲ離ツ事ヲ得サルホド  
 オモシロキ書ナリ

江戸書肆

慶元堂主人謹白



